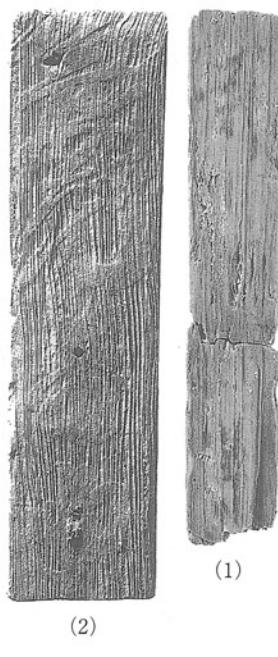


(2)
「晨尅□助」

209×53×5 011



(2)

(1)は下端が折損している。上下の字間がかなりあいているが、その間の文字の存否は判別できない。(2)は腐蝕が著しく墨痕は残っていないが、文字の部分がわずかな隆起により判読できた。下半には上下に並ぶ二ヵ所の釘孔があり、下の孔には竹釘の一部が残存していた。この釘孔に対応する裏面には竹を割つたものが取り付いている。樹種は特定できないが、(1)(2)とも針葉樹の柾目材である。

なお、釈読にあたっては、大阪城天守閣の北川央氏にご教示いただいた。また、掲載した写真は阿南辰秀氏の撮影による。

9 関係文献

大阪府教育委員会 「萱振遺跡」（大阪府文化財調査報告書三九、一九

（廣瀬雅信）

木を見て「文字」を見ず

木簡の持つ歴史情報のうち、圧倒的的部分は文字が占める。そのためか、文字（＝墨書）がよく見える写真が好まれる傾向にある。コントラストを上げ、墨書部分をより黒く、それ以外をより白く（薄く）すれば、文字はよく読める。赤外線写真では、木部の情報はほとんど表現されない。

しかし、「木に墨書したもの」が木簡なのだから、木目・風合いなどの「木」の情報が表現されなくて良いはずがない。文字をしつかり再現しつつ、木の風合いもきちんと表現するのがベストである。しかし、両者の両立はなかなか難しい。そこで、文字を表現するために木部の情報が消える恐れがある場合には、可視光写真で木部を再現し、赤外線デジタル写真で文字情報を表現する。あるいは墨痕が消え浮き上がりや色の違いだけで文字の痕跡が残る場合や加工に特徴がある場合には、斜光写真を併用する。目的に合わせて撮影方法を組み合わせる必要がある。

『平城京木簡三』はそうした実践の一例であるが、はたしてどれほど成功したか、大方のご批判を仰ぐこととしたい。

木を見て「文字」を見ずというのも、木簡研究の一つのあり方だと思う。

（馬場 基）